



No. 1 《褐釉白斑壺（南蛮芋頭水指）》時代不詳 產地不詳 M1201



No. 2 《青花方形壺（安南四方水指）》17世紀 ベトナム M1199



No.4 《青花思字文盤（安南思字平鉢）》17世紀 ベトナム M1319



No.14 《鉄絵花文合子（宋胡録鉄絵合子）》15世紀 タイ、シーサッチャナーライ窯 M2390



No.17 《青磁面取双耳瓶》 15～16世紀 タイ、パーン窯 M1711



No.25 《白釉花卉文盤》 15～16世紀 ミャンマー M2397

木村定三コレクションにみる日本人の東南アジア陶磁鑑賞

鶴見大学 矢島 律子

木村定三は日本陶磁を中心に世界各国の陶磁器を蒐集した。その中に東南アジア陶磁38件が含まれている。

日本人と東南アジア陶磁のかかわりは、14世紀まで遡る。例えば大宰府遺跡から14世紀のベトナム鉄絵草花文碗片が出土しているのをはじめ、中世では博多、壱岐、対馬といった九州や瀬戸内海域でベトナム陶磁の輸出初期の出土陶片や伝世品を見ることができる。特に南シナ海の中継貿易で栄えた琉球王国の遺跡では、上質なベトナム青花の例が報告されているⁱ。いっぽう、以前からよく知られているのが、「安南」「宋胡録」「南蛮」「島物」と呼ばれる茶道具としての東南アジア陶磁であろう。これは、16世紀後期から17世紀初期の朱印船貿易や南蛮貿易が盛んであった頃に運ばれてきたものが中心である。伝世品のほかに、博多や堺、長崎といった交易港、京都、大坂、豊後大友府内町といった安土桃山時代の城下町、そして江戸の大名屋敷跡などからも茶道具を含んだ東南アジア陶磁が発掘されている。和物や朝鮮物、古典的唐物に比べると茶道具のなかでは必ずしも高い位置づけにはなかったものの、主要な脇役として一定の地位を得てきたⁱⁱ。近代以降、日本の陶磁器鑑賞は茶道具の枠を超えて作品そのものを味わう「鑑賞陶磁」という分野を確立していったが、東南アジア陶磁もその中に引き続き組み込まれていった。特に、第二次世界大戦後の1960年代から1970年代の東南アジア諸国は激動の時代となって世界の注目を集め、それに伴ってこの地域の文化や歴史に対する関心も高まった。20世紀第4四半期には各国の政情が次々に安定するに伴って東南アジア陶磁の鑑賞と研究が急速に進み、現在に至っているⁱⁱⁱ。日本には中世以来の東南アジア陶磁器鑑賞の伝統が綿々と続いてきたから、陶磁器を通じての東南アジアの文化と歴史へのアプローチが用意されていたともいえる。

木村定三蒐集東南アジア陶磁の構成

上記のような日本における東南アジア陶磁鑑賞史を踏まえると、現在の日本に東南アジア陶磁として伝わる作品をその由来に沿って分けると以下ようになるであろう。

(1) 茶道具

- a. 現地使用として現地で生産され、日本に将来されたのちに「見立て」によって茶道具にされたもので、年代の中心が安土桃山時代から江戸時代前期(16世紀～17世紀)であるもの。
- b. 茶道具として日本の注文により現地で生産されたもの。年代の中心が安土桃山時代

から江戸時代前期（16世紀～17世紀）である。「注文手」と称する。

- c. 定着した様式にのっとり、日本で生産されたもの。江戸時代から現在まで作られている。「安南手」と称する。
- d. 近現代に将来されて、「見立て」により茶道具になったもので、特に20世紀後半に多い。

(2) 鑑賞陶磁

近代以降、特に20世紀後半に将来されて美術鑑賞の対象とされた作品。

本稿では、木村定三蒐集東南アジア陶磁のうち、特に上記(1) a～dに相当する作品を検討してみたい。M1201・M813・M1401・M1377・M2390・M1572、およびM549・M550・M551・M568・M1199・M1318・M1319・M2244である。これら以外の作品は、すべて前述分類(2)に該当する。

(1) a. M1201褐釉白斑壺（南蛮芋頭水指）

この水指は、胴中央を境に上半身、下半身がほぼ対称形に形作られ、ちょうど里芋のような特異な形状をした壺である。土味は粗いピスケット状で、紐作りの痕が筋状に残っている。釉底には板起こしの痕が残る。釉というよりも、鉄分の多い泥漿を掛けて焼成している。鉄泥漿の上に白化粧の班文がつけられている。南蛮芋頭水指の伝世例は他にも知られているが、産地や年代はいまだにはっきりしない。伝世品のなかにも土味や形に差異がある。ベトナム、タイ、カンボジアの陶磁にはないので、中国南部といわれることが多いが、具体的には不明である。こうした壺は現地では生活に密着した道具として姿に大きな変化なく、長く作り続けられた可能性が高い。

ミャンマーの中南部モールミヤインの近郊で現在も生産を続けているムボン村で、この形に近い壺を生産しているのを見たことがある。芋頭水指よりは緩んだ形で、ベタ高台には回転糸切の痕が残っているなどの違いはある。しかし、ミャンマー陶磁は、白釉盤が堺環濠都市遺跡や長崎から、黒釉大壺が豊後大友府内町遺跡から出土しており、数は少ないながらも15世紀後期から16世紀にかけて日本に渡ってきていたことがわかっている。南蛮芋頭水指の産地はより広い視野で考える必要があるだろう。

- (1) d. M813鉄絵碗（宋胡録鉄絵小服茶碗）、M1401青磁鏤文双耳小壺（宋胡録青磁振出）、M1377灰釉鉢（建水 銘 擊竹一声）、M2390鉄絵花文合子（宋胡録鉄絵合子）、M1572五彩花文合子（紅安南花文合子）

これらは前述分類(1) d. に該当する。どれも、伝世品特有の使用痕や経年変化がほとんど認められない。

宋胡録（スンコロク）というのは、タイ中北部のサワンカロークという都市の発音を漢字に写した名称と考えられている。サワンカローク古城はスコタイ王国以来の主要な都城で、その近郊に実際の窯業地としてシーサッチャナーライがあり、14世紀後半ごろから

陶磁を生産していた。また、スコータイ王国の都城の外にスコータイ窯があった。日本に将来され、江戸時代以前に茶道具に取り入れられたシーサッチャナーライ窯やスコータイ窯の製品のほとんどは鉄絵の小合子で、安土桃山から江戸初期の遺跡出土資料についても、大小はあるがほとんどが合子である。伝世品では松平不昧公の『雲州蔵帳』にも記されている「柿の^{かきのへた}」香合がよく知られている。

M813宋胡録鉄絵小服茶碗は、砂粒を含む粗い暗色の胎土に白化粧を掛け、鉄絵を描いている。スコータイ窯の特徴を示す碗で、焼き歪みがある。焼き歪みが目立つ製品が交易品として出土した例を筆者は知らない。歪みは意図したものではなく、20世紀後半に窯跡出土品が日本に持ち込まれたものと考えられる。木村定三は、その歪んだ成りの面白さと寸法を愛でて、小服茶碗としたと考えられる。同様にM1401宋胡録青磁振出はシーサッチャナーライ窯の15世紀の作で、15～16世紀の日本の遺跡からはタイ青磁の出土例はなく、シーサッチャナーライ窯の製品は16世紀以降の鉄絵が生産の中心になった頃に日本に運ばれるようになったと考えられている。現代に将来されたタイ青磁双耳壺の中から、成りと寸法、そして青磁釉の良さからこの一点を選んだと考えられる。

M1377建水銘 撃竹一声は、カンボジア古王国ともいえるクメール王国で10～11世紀ごろに作られた灰釉筒形鉢を建水に見立てたものである。クメール陶磁の鉢には、口が大きく開いた逆円錐形の形で胴裾に凸条文が巡らされたものが多いが、本作のように、筒形にすばまり、胴裾の凸条文と相まって竹の節のように見える作も稀にある。クメール陶磁はヒンドゥー文化の影響が色濃い宗教的器物に生産を限っている点が特色で輸出用は作っておらず、国外出土例が極めて少ない。日本にその存在が知られるようになったのは近代以降、特に20世紀後半以降のことなので、この水指建水は現代になって日本に運ばれた作品を見立てたものといえる。こうした鉢を20世紀後半以降の日本の収集家間では慣例的に「托鉢形」と呼んできた。「撃竹一声」という銘は、例えば、大仙院衣鉢の間の東側に「徳山托鉢」図とともに狩野元信が描いた「香巖撃竹」図を連想させるが、木村定三はどうだったろうか。

さて、次の作品群（1）b、（1）cは、日本のベトナム陶磁鑑賞の歴史を象徴するものの、研究者にとっては悩ましい一群である。すなわち、M1199青花方形壺（安南四方水指）、M1318青花蜻蛉文輪花皿（安南蜻蛉文皿）、M1319青花思字文盤（安南思字平鉢）、M549染付魚文碗（安南手魚文茶碗）、M550染付人物文碗（安南手人物文茶碗）、M551染付船文碗（安南手茶碗 銘入船）、M568染付人物文碗（安南手人物文茶碗）、M2244染付花鳥文壺（安南手花鳥文壺）である。

（1）b. 注文制作については、ベトナムはすでに15世紀にインドネシア向けにタイルの注文制作を行なっている^{iv}ので、朱印船時代に日本向け注文制作を行った可能性は十分にある。

よく知られている例に大澤家伝来の青花水指2点がある。日本以外では発見されていな

い器形であることから注文制作と考えられる。そのうちの1点には「絞手」と呼ばれる染付部分の滲みや流れが見られる。同様に根津美術館所蔵例をはじめ「蜻蛉手」と呼ばれる絞手茶碗は、しばしば碗形を正円ではなく三角や四角に作為的に歪めている。蜻蛉のほかには蝦文などもあり、長崎金屋町遺跡からは蝦文碗の出土例がある。このほか、注文制作と考えられるベトナム青花の遺跡出土例には、堺環濠都市遺跡出土の菊形双龍文皿（高台内「福」字銘）・菊形笠文皿、京都市出土菊形龍文皿（高台内「福」字銘）がある。これらは、素地や釉調、染付の流れ具合が大澤家伝来水指や16～17世紀のベトナム国内で数多く制作された大型燭台や香炉に近い。

いっぽう、近年19世紀前半と考えられる江戸の遺跡で（1）c. に当たる染付製品が複数出土した。新宿区水野原遺跡や四谷1丁目遺跡、文京区白山御殿跡からで、この他に、染付ではないが南蛮繩簾風の火入れが中央区から出土している^v。どれも1600年前後のベトナム陶磁の特徴 — 例えば、染付顔料の発色や見込みの釉剥ぎ、高台内の鉄錆など — や情趣をよくとらえているが、詳細に検討すると文様や文様構成、器の大きさや形、素地がベトナム産とは異なる。水野原遺跡出土染付鉢には高台外側に施釉の指痕が残っていたり、中央区出土の南蛮繩簾風火入れには底面に印銘が捺されており、ベトナム陶磁にはない作為的手法が認められた。鎖国とベトナム陶磁自体の輸出陶磁生産衰退により入手が困難になってから、かつてのベトナム陶磁の様式としての「安南」を、日本国内で再生産したものと考えられるが、これらの産地はまだ特定できていない。

以上のような近年の研究成果を踏まえて、M1199・M1318・M1319・M549・M550・M551・M568・M2244を検討すると以下ようになる。

（1）b. 注作品

M1319青花思字文盤（安南思字平鉢）、M1318青花蜻蛉文輪花皿（安南蜻蛉文皿）、M1199青花方形壺（安南四方水指）

これらは、ベトナム産と考えられるが国内向けベトナム青花には見られない器形のものであり、日本から茶道具用に注文されたと考えられるものである。

M1319安南思字平鉢は、類例が静嘉堂文庫美術館にある。いずれも素地や釉調、染付の滲み具合などが大澤家伝来青花水指同様に17世紀頃ベトナムで数多く作られた大型燭台に似ている。管見ではベトナム現地の類品がない。見込みに記された文字は滲んで判読が難しいのであるが、漢字でない文字が含まれているようであり、あるいは（1）a. 見立ての「安南」かもしれない。

M1318安南蜻蛉文皿、M1199安南四方水指は（1）b. の注文制作による「安南」と考えられる。M1318安南蜻蛉文皿はやや焼きが甘いが、堺環濠都市遺跡出土の青花菊形双龍文皿（高台内「福」字銘）・青花菊形笠文皿などの一群と考えられる。

M1199安南四方水指は大澤家伝来青花水指のような釉調や染付の滲み方に近い。轆轤で引き上げてから四角く成形している点に陶工が注文に応じようとした工夫の痕が見える。

文様は15世紀以来ベトナム青花の風景文に時々現れる草文である。

(1) c. 安南手

M549染付魚文碗（安南手魚文茶碗）、M550染付人物文碗（安南手人物文茶碗）、M551染付船文碗（安南手茶碗 銘入船）、M568染付人物文碗（安南手人物文茶碗）、M2244染付花鳥文壺（安南手花鳥文壺）

これらは、日本産（1）c. の可能性が高く、名称も「安南手」とした。

M549安南手魚文茶碗は、割高台といういかにも茶人好みの特異な造形を別としても、素地が比較的肌理細かく均一で（1）a. b. とは異なる。また、ベトナム陶磁では伝統的に高台内を無釉にするか鉄銹を塗布するという手法が通常で、これは轆轤引き→化粧掛け→施文→施釉→高台内外の削りという手順を反映したものと考えられる。特別な注文制作としても、この碗のように高台内側壁までたつぷりと施釉し、畳付きの内外をほぼ同幅に釉剥ぎするという念の行った仕上げは例がない。

M568安南手人物文茶碗は、見込みの釉が環状に削られているものの、重ね焼きには用を為さないうえに、別に目跡が残っている。見込みの釉剥ぎは単なる装飾である。また、ベトナム青花に例のない白濁釉が掛けられている。

M550安南手人物文茶碗、M551安南手茶碗（銘入船）の形はベトナム青花碗に特徴的な高い高台の付いた碗・鉢の形を念頭に制作している。M550のように側壁に吉祥の意味を込めた文字を書く手法はベトナム国内向け製品に例がない。M551の人物表現は素朴を狙い過ぎていますが、モチーフ自体は15世紀のホイアン沈没船引き揚げベトナム青花に僧侶や士大夫、市井の人々などを風刺画風に描いたものがあるので、本歌の味わいを強調した作とみることができる。

M2244安南手花鳥文壺は、口の広い、茶器に適した形の小壺である。純白でない肌合いに灰色がかかった染付で、素朴な筆使いの花を描いている。素直な作行きで作為はないように見えるにも関わらず、器形、素地、文様を具体的に検討すると、ベトナム陶磁に類例がない。南中国の粗製の青花に多い手早さや荒々しさもない。

以上のような「安南手」とした作品の製作地や年代には、かなりの幅があると考えられる。しかし、いずれもベトナム青花の特徴をよく捉えており、日本人の持つ「安南」のイメージに基づいて日本で作られた作のように思われる。時には「安南らしさ」を強調した上で茶道具として使いやすい形と大きさに変換している点が興味深い。

（1）b. とc. に属する作例は他にも多く、従来から国籍と年代が問題にされてきた。木村定三が安南を好み様々な作例を所蔵していたことで、この問題が今回明確に意識された。（1）b. と（1）c. の判別は困難な場合も多いが、更なる類例の調査と情報の蓄積によって、「安南手」の歴史が明瞭になっていくことであろう。

以上、木村定三の東南アジア陶磁蒐集の傾向、特に茶道具として蒐集された作品を分析

してみた。木村定三蒐集の東南アジア陶磁の数は多くはない。しかし、おそらく木村定三コレクション全体に通じる特色であろうところの、日本の古陶磁蒐集家として、また茶人としての特色が表われている。茶道の精神を起点に、その産地である東南アジアの歴史や文化に対する知的好奇心が広がり、近年の研究進展に刺激されて蒐集を進めた軌跡が読み取れるように思われる。

-
- i 中野光将「日本出土のヴェトナム陶磁器」『ヴェトナム陶磁の二千年』町田市立博物館、2013年
 - ii 江戸時代の骨董の大百科事典として流布した『古今和漢万宝全書 和漢諸道具見鈔』（元禄7年/1694年）中に、安南、宋胡録、南蛮の項が見える。
 - iii 矢島律子「東南アジア陶磁のやきもの」『町田市立博物館所蔵 東南アジア陶磁』瀬戸市美術館、2011年
 - iv Guy, J. S., "The Vietnamese Tiles of Majapahit", *Transactions of the Oriental Ceramic Society*, vol 53, 1988, London
 - v 文京区遺跡調査会『白山御殿跡ほか 文京区埋蔵文化財調査報告書28』2003年
（財）東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター『水野原遺跡 5 東京都埋蔵文化財センター調査報告 252』2010年